

さらにすぐれた甦り

2025年5月11日

ヘブル人への手紙 11章35節
列王記Ⅰ 17章8～24節
列王記Ⅱ 4章18～37節

序：「復活」はキリスト教信仰の要の教理

使徒たちが伝えた福音の重要なポイント：主イエスは死んだが、甦って今も生きて
いる

旧約においては、未来の、永遠のいのちのことがあまり明瞭には示されていない
地上でできるだけ長生きすること＝神の祝福と考えた

真の神を知らない世界においては同じように考えられてきた

今日は母の日（開かれた聖書の箇所はタイムリー）

I. 死んだ身内の者を生き返らせていただいた女たち（二人とも母）

(1) ツアレファテのやもめ 列王Ⅰ 17・8～24

ひとりむすこを

エリヤによって

女の信仰 < 預言者の信仰

一握りの粉とほんの少しの油 ⇒ 瓶の粉は尽きず、壺の油はなくなる
息子の死

「あなたは私の罪を思い知らせ、私のむすこを死なせるのですか」

エリヤの主への祈り（三度その子の上に身をふせて、いのちを戻して下さい）
生き返った

エリヤが神の人、主のことばは真実、と女は告白

(2) シュネムの裕福な女

列王Ⅱ 4・18～37

奇跡的に与えられたひとりむすこを

エリシャによって

女の信仰 > 預言者の信仰 > 夫の信仰

息子の死

預言者エリシャに奇跡を行う力があると信じ、自分でカルメル山のエリシャを
訪れ、同行を求める（エリシャは若い者ゲハジを代理で行かせるつもりだった
が）

主への祈り（口と口、目と目、両手と両手を重ね、子の上に身をかがめた）
生き返った

エリシャの足元に、地に平伏した後、子どもを抱き上げて部屋を出ていった

II. イエス・キリストが公生涯の間に生き返らせた人たち（女の人たちの身内）

(1) ナインのやもめの息子 ルカ 7・11～16

(2) 会堂司ヤイロの娘

マルコ 5・21～43、ルカ 8・40～56

(3) ペタニヤのマルタとマリアの兄弟ラザロ ヨハネ 11・1～46

これらの人々（Ⅰ、Ⅱ）は奇跡によって、死んでいたのに生き返った
しかし、生涯をまっとうした時、体は再び死んだ

Ⅲ. もっとすぐれたよみがえりを求めた人たち

Ⅱ
永遠のいのちへの復活
真の復活

- (1)彼らはこの世でいくばくかの間永らえるからだの命を求めなかった
- (2)彼らは「生き返る」以上の「もっとすぐれたよみがえり」があることを知って、それを得ようとして求めた
- (3)そのためには、迫害や拷問を避けることをせず、甘受した（アンティオキ・エピファネスⅡ）
- (4)彼らは神の律法、信仰を捨てるなら拷問の苦しみや殉教を免れることができるとことば巧みに勧められたが、ためらうことなく殉教の道を選んだ
例：高齢の律法学者エレアザル（第二マカベア書 6・19）
7人の兄弟とその母の壮絶な殉教の死（同 7章）

ペテロ、パウロなど使徒たち AD 60年代（皇帝ネロ）

スミルナの監督ポリュカルプスの殉教 AD 155

「私は86年間仕えてきましたが、彼は何一つ私に悪いことはなさいませんでした。それなのにどうして、どうして私を救ってください王を汚すことができますよう」（皇帝礼拝に抵抗）

- (5)旧約では、永遠のいのち、体の復活について十分明瞭に語られていない
人々は現世で長生きすることが、むしろ神の祝福と考えていた
しかし、マカベア時代の激しいキリスト信者への迫害に正面して、敬虔な者たちは、旧約聖書の中の永遠に関するみことばや栄光のからだへの復活の教えに注目、信仰が高まった サドカイ派以外のユダヤ教は復活を信じた（イエスの時代）

Ⅳ. 結び

- (1)神とみことばに従う理由は、信じる者に永遠のいのちにふさわしい栄光のからだに復活して、永遠に神の御国に住むという確かな約束があるからである
- (2)この世で生き返ることもすばらしい奇跡ではあるが、そのからだには限界があるいつかは死を迎えるからである
- (3)私たちが求めているのは、この世で「生き返ること」「単に長生きすること」ではない。もっとすぐれたよみがえりを得ることである
- (4)そのために、何らかの犠牲を払わなければならないかもしれない
甘受する覚悟が必要になるとき、聖霊に頼り、みことばに聴き従い、進んで行くことができる 逃げないで、立つべきところに留まること